
剣戟 ~ Spade Halberd ~

いも潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣戟 ～Spade Halberd～

【Nコード】

N9736F

【作者名】

いも潤

【あらすじ】

ある夜。魔道師たちの住む里に、邪悪な魔の手が奇襲をかける。その目的は、大賢者の館に保管されているあの力だった。そんなことも知らない、ある村に住む少年ソウルは、剣術の修行に明け暮れていた。しかし突然、暴走した火山へ調査に行った父親が行方不明となってしまう。少年は搜索を決意するが・・・？少年を待ち受ける運命とは・・・？

第一章 灼熱の火山 veri・i (前書き)

はつきり言って非常に長いです。第一章のveri・iだということに
。。。まあ、飽きずに読んでみてください。お願いします。

第一章 灼熱の火山 ver.1

そう。その歴史に刻まれるのは君たちの名。

神が創りしその戦士たちは、己の道よりも世界に尽くした。

誰もが疑いもしなかった。この平穏な世はいつまでも続くものだと信じていた。

その期待は邪悪な手によって黒く染め上げられることになる。そんなことも知らずに。

希望は彼らだけ。神の結晶のもとに集いしその戦士たちは、疾風の如く走り抜ける。

光は彼らに託された。

皆が祈った。彼らが無事にこの世に光を取り戻してくれる、そう呟きながら。

さあ、突き進め。魔石に籠められしその魂を胸に秘めて

一 暗黒の夜

月も星も見えないような夜だった。黒き甲冑に身を包み、黒い仮面で顔を隠した男が、二体の怪物を連れ、ある館の前にたどり着いた。三階建てのこの建物は、いかにも大切な物を保管してあるような雰囲気漂わせていた。

この館は魔道士たちの住む里の近くにあり、数多い見張りが厳重

な管理体制が整えていた。少なからず、数刻前はそうだった。今となつては館への道は見張りの死体ばかりで、見るも無残な有様だった。

男は扉の取手を引くと、ギギギと音を立てて開いた。中はとても静かで、緊迫した空気が男の気を引き締めさせた。一步踏み出すと館内に足音がこだました。大広間らしきその空間には大きな柱が数本あり、正面は二階へ通じる階段があつた。見上げると、吹き抜けの構造になっており、二階の階段付近が少し見えた。

「貴様ら！！ 何者だ！？」

男は突然声をかけられ、足を止めた。そして、一度深呼吸した後、ゆっくりと振り返つた。怪物たちも続いて、声のする方を確認した。そこに見えたのは大きな人影。その影の人物は、今までの敵とは全く違う鎧を着た兵士。右手に大きな槍を握りしめ、体中がぶるぶると震えていた。

「あなた、怯えてんの？」

一人の怪物が、ふふと笑つた。

「ガリスト、調子に乗るな」

ガリストと呼ばれた怪物はふふんと鼻で笑つた。

長い金色の髪を押さえたこの怪物は、怪物らしき形をしておらず、ほとんど人間の女性の姿だった。しかし、その美貌からは想像もつかないほどの殺人を犯していたことは、空気から読み取れる。

「質問に答える！！ 貴様らは何者だ！？」

兵士は恐怖を抑え、あくまで強気の姿勢を見せた。それと同時に槍を握っているもう片方の手をそっと槍に添えた。

「ぐふ、残念だがその質問には答えられないなあ。なぜなら……」

そう言ったのは、もう片方の怪物だった。体についている数本の触手をくねくねと撓らせ、青く光る目を兵士に向けた。長い間口に獲物をくわえていなかった獰猛な肉食動物のように。

「タクラテス。あんたも余計なこと喋らなくてもいいよ」

ガリストはタクラテスを睨みつけた。

「ぐふ、指図するなあ。俺に指図できるのは、この方だけだぞお。

そもそも俺とお前は組んではいけない二人なんだあ。そんなことはわかってんだろお？」

タクラテスは顔を背けた。

「あんたねえ!!!」

「いい加減にしろ」

男は仮面の下で怪物たちを睨んだ。

「わ、悪かったわよ」

「ぐふ、申し訳ない」

すっかり忘れられた存在だった兵士は、ここぞとばかりに猛突進

した。怪物たちはドキリとしたが、何の構えも見せずに立っている。兵士は鬼のような形相で槍を突き出した。

しかし、ガリストの目の前で槍は止まった。

「……？」

兵士は力を込めて押したがぴくりとも動かない。兵士の顔は次第に恐怖へと変わり、槍を引こうとしたが、これも全く動かなかった。すると次の瞬間、兵士の体は宙に浮き、そのまま柱に向かって投げ飛ばされた。鎧がガシャリと音を立てて柱に衝突し、兵士は体勢を崩した。

その様子をガリストたちは哀れむような目で見ていた。兵士は地につき、何とか立ち上がる。しかし、その足には疲労と恐怖が押し掛かり、足がガクガクと震えている。足取りも儘ならない。ガリストは笑みを浮かべながら、槍を兵士の足元へ転がした。兵士は顔を強張らせ、槍を拾い上げた。顔が兜に隠れて表情は見えなかったが、おそらくとんでもない顔をしていたに違いない。

兵士は槍を突き出し、もう一度突進した。やつらには半端な技術では勝てそうにない。そうなれば、方法はただ一つ　力で押す。兵士は体中にある全ての力を槍の矛先に集めた。ガリストたちは相変わらず冷たい目で嘲笑している。

兵士はガリストたちの心を読んだ。今のやつらは油断している。これならひよつとするかもしれない。

恐怖と緊迫に張り詰めた環境のなか、兵士は大きく跳び上がり、槍を閃光のごとく振り下ろした

男と怪物たちは、足音を立たせ始めた。一人の姿を残して。

「ねえ、あんなところに置いておいていいのかい？」

ガリストは男に向かって言葉を発した。しかし、男からの返答は無い。ガリストはいつものように会話を終わらせた。

部屋の雰囲気は先ほどまでとは大きく変わり、あたりをどす黒い赤に染めていた。兵士の血によって。兵士は柱にもたれかかっている。しかも、原形すらつかめないほど無残な姿で。

男たちは目の前の階段に足をかけた。みしみしと木材がきしみ合う音が聞こえる。階段を上りきると、正面に青色に染められた大きな扉があった。扉には紋章が浮かび上がっているが取手が見当たらない。男は扉に触れようと手を伸ばした。すると扉の紋章が輝き始め、青白い柔らかな光が男の手を跳ね除けた。

「やっかいな封印だね」

ガリストがため息交じりに呟いた。

そのとき、多くの鉄のこすれ合う音が聞こえ始めた。この耳に障るような音は鎧がぶつかり合う音……たくさんの鎧をまとった人間、そう、館に援軍が駆けつけたのだ。鎧のぶつかり合う音は次第に大きくなり、すぐそこまで近づいている。タクラテスは体から数本の触手を伸ばした。続いてガリストは片手を差し出し、手のひらに力を集めた。その力は次第に実体化されパチツとは弾けて一本の鎌を生み出した。鎌の刃には固まって酸化された血がべつとりとこびりついていた。二人の部下は、男を守るようにして背中を合わせた。

次の瞬間、突如現れた数十人の兵士が電光石火の早業で弓を構え、男たちを包囲した。

「ぐふ、思ったより数が多い」

タクラテスは触手を撓らせてはいたが、先に動けば宣戦布告とみなされ、敵は総攻撃を仕掛けてくる。互いにピクリとも動かない緊迫した硬直状態がその場を覆った。その空気を破るかのように、一

人の老人が兵士たちの間からすつと現れた。

「何年ぶりかの。久々に面を見せにやって来たかと思えば、こんな戯けたことを……」

老人は手にしていた杖で床をコツコツと叩いた。男はしばらく黙りこくっていたが、ようやく口を開いた。

「お久しぶりです。わが師……ルトン・アール殿」

剣と鎌がこすれ合い、火花が散る。兵士とガリスト、両者は一度退きあい、間合いを置いた。すかさず一本の矢が彼女めがけて放たれた。

ガリストはいち早くそれに気づき、鎌で矢を弾いた。矢が宙に弾むと、ガリストは跳び上がり矢を宙で掴み、弓兵に向かって投げた。弓兵は突然のことかわしきれずに、運悪く胸部に直撃した。

血が噴出し、弓兵は床に倒れるとそのまま起き上がらなかった。あたりには、同じように起き上がらなくなった兵士たちの死体がごろごろと転がっている。剣を持った兵士はガリストの隙を突き、彼女の背中めがけて跳び上がりながら剣を振り下ろした。

しかし、剣は彼女の背中に当たる直前に急停止した。兵士はそのまま勢いで床に投げつけられた。

「残念ね。筋がいいとは思うけど、相手が悪かったね」

ガリストは容赦なく鎌を兵士に叩きつけた。彼女の顔は返り血でところどころ赤くぬれている。

そのとき後ろで、剣が空を切る音が聞こえた。ガリストは驚いて振り返った。もう少して髪が切られるところだった。剣で一撃を放ったのは、現れた別の兵士だった。

「あんだねえ。許さないわよ!!」

ガリストは鎌を床に突き刺した。すると、床に入った割れ目から少し風が吹き込んだかと思うと、風は次第に強まった。

「ウインドストーム!!」

得意げにガリストが叫ぶ。兵士は剣を床に刺し、自分の体を支えるのが精一杯だった。散らばった兵士たちの死体やなにやらが吹き飛ばされていく。兵士はついに耐え切れずに、突風にあおられ宙に浮いた。ガリストは笑いをこらえていたが、とうとう我慢しきれずに大声を上げて笑い出した。その時、彼女の体に、奇妙な刺青が彫られてあるのが見えた。彼女だけはこの風の影響を受けていなかった。

「ぐふ、ぐははは。こんな技を使いおつて。ただでは済まさないぞお」

タクラテスは二本の触手を床に突き刺し、自分の体を支え、残る数本の触手で次々と敵をなぎ払った。こちらはガリストとは別の場所で応戦している。しかし、ガリストの発生させた突風の威力は凄まじく、一階下のこのフロアまで風が吹き込んでいる。さすがのタクラテスも、触手が無ければ自分の体を支えることはできなかったであろう。風の影響で兵士たちは身動きができない上に、自分には体を支える以外の触手が数本残っている。こんな絶好の機会はなかった。

「ぐふ、ぐははは。無様だなあ」

タクラテスは触手を伸ばすと、触手の先についている鋭利な爪で一人の兵士の体を突き刺した。

「ぐふ、ぐふふふ」

タクラテスは奇妙に笑い、兵士を投げ飛ばした。

その時。一本の矢がタクラテスの顔をかすめた。タクラテスは怒りに満ちた目で、矢の発射方向を確認した。

すると、扉の取手に鎧をひっかけ、自分の体を飛ばさないようにしている弓兵の姿があった。タクラテスは大きく吼えたと、目にもとまらぬ速さで触手を伸ばし、弓兵の体に巻きつけた。タクラテスは弓兵を引き寄せると、別の触手を彼のどの元に突きつけた。その時、兵士は見た。彼の体に刻まれた、奇妙な刺青を

「ぐふ、後悔しろ。俺に傷をつけたことをなあ。死を持って報いるがいい」

タクラテスはぐふふと高らかに笑った。その声は、計り知れない力量を持った怪物の声であった。

男は魔力を持った特別な剣で、飛んでくる水球を斬り放った。男は重すぎるはずの鎧を装備していながらも、信じられないほどの軽い身のこなしを見せた。

突然、男は走り出し、杖をもった老人に斬りかかった。しかし、老人も老人でその年齢からは予想もつかない体捌きで男の一撃をかわした。

「アクアキャノンを軽々と斬り落とすとは……なかなかやるのお。しかし、おぬしの癖は相変わらず治つとらんの」

老人……ルトン・アールと呼ばれた老人は、かの有名な大賢者であった。この里一番の魔力を持った老人は、数々の魔術の扱いに長け、次第に彼は大賢者と呼ばれるまでにもなっていた。

しかしその年齢は、もはや戦う力さえ持たないのではないかと言われるほどであったが、彼にはそんなことは関係なかった。里を窮地に追い込む輩が現れたのなら、その輩を潰すのみ。

「アール殿。昔と変わらずその間抜けさは変わらないのですか？」

男はアールの足元に剣を向けた。アールはぎよつとして、足元を確認すると、そこには男の仕掛けた罠があった。起爆罠である。アールはとっさに杖で魔法を唱え、自分の周りにうすい水の壁を作った。その直後に起爆罠が発動し、激しい音と煙があたりを包む。男は煙が晴れるのを待った。やったのか……。

しかし、過去にあの大賢者からは数々の魔術を教わった。その大賢者が、起爆罠などで命を失うことはない。あれこれ考えるうちに、煙は次第に薄くなり、視界が広がる。男は一步前に進み出た。

そのときだった。長い一本の鎖が男の足に絡みついた。男は退こうとしたが遅かった。アールは男の後ろに立っていた。

その時、男の鎧に奇妙な紋章が彫られているのが見えた。その紋章は男の仲間の体に刻まれていた刺青と全く同じものだった。しかし、アールはそんなことは知らなかった。

「刻印……。おぬしよ、自分で言うのもなんだが、わしは自分のことを間抜けなどとは思ってらんぞ。今のリクリッドウォールが何よりの証拠じゃ」

アールは男に返事をさせる隙も与えず、魔法を唱える。杖に魔力が集められ、杖先が蒼く輝く。その輝きはフロア全体へと広がり、一瞬にして館全体を冷気で包み込んだ。

「さすがはアーブル殿。館全体を包むほどのキルエアリルを発生させるとは。しかし、結局その程度の魔術ならば……甘い。貴方は、何も知らない。何も……」

アーブルは一瞬うろたえた。男が何を言いたいのか、見当もつかない。男は剣を床に突き刺した。そして漆黒の兜に両手を当て、静かな音を立てながら兜を脱いだ。アーブルは目を見開いた。

「おぬし……そんな、馬鹿な……!!」

アーブルはがっくりと膝を突いた。その手からは杖がこぼれ、音を立てて床に転がった。男の足に絡みついていた鎖は、水となって消えた。男は兜を持ち上げ装備すると、床から剣を抜き放ち、アーブルの目前に突きつけた。

「貴方にこの苦しみは分からない。しかし、貴方をここで消すことで、この苦しみは少しだけで和らぐ。力を貸してくださいませんか？」

男は兜の下から、低い声で呼びかける。アーブルは、言葉すら発することができなかった。自分の弟子が、この長い間にこんな姿になっただいようとは……。アーブルは目を閉じた。男はそれを合図だと受け取り、剣を振り下ろした

「これは一体……!？」

嵐が去った後のような道を数人の魔道師たちが歩いていった。そこに散らばる武器の数々。あちこちに倒れている兵士たち。何か気持悪いものを見ているような表情をした魔道師たちは、杖を使っ

て兵士たちの亡きがらを光で包む。感染病予防のためだった。

「私はアーブル様を探す。お前たちはこのあたりを片づける。いいな？このことは決して口外するな！！」

一人の若い魔道師が指示を出した。白いローブに身を包み、一際長い杖を携えた男だった。

「了解」

魔道師たちはうなずく。彼はおそらくこの里長であろう。

崩れ落ちた瓦礫の山を越え、その魔道師は杖に光を灯した。あたりが眩しく照らしだされる。

「ア、アーブル様！！」

その魔道師が見つけたのは、あの大賢者の遺体だった。

「アーブル様！！」

駆け寄って抱きかかえたが、その大賢者の首はがっくりと垂れるばかりだった。

魔道師は最後に大賢者の杖をその手から離し、遺体の傍らに置いた。

そして、あたりを見渡すと、やはり。嚴重な封印が施されていたはずの扉が無残にも破壊されていた。

「…彼らが、動き始めた」

魔道師はぼつりとつぶやく。歩み寄った台座には、あったはずの秘宝がない。神の遺した光の結晶が。

そんな魔道師を影で見つめる少女の姿があった。少女は息を殺して身を潜めていた。しかし、涙が止まらない。

「アーブルおじいさん」

少女は涙をこぼした。茶色のセミロングの髪が揺れる。水色の服をきたその少女の手にも、杖が握られている。その杖先の結晶は、なぜか寂しそうな光を放っていた。

その夜。たった数人の凶悪な魔の手によって赤く染め上げられたのだった。

第一章 灼熱の火山 ver.1 (後書き)

お疲れ様です。まだ主人公は登場していませんが、気にしないでください……。基本、「投稿は早めに」精神を心がけますが……。これからもよろしくお願ひします!!

第一章 灼熱の火山 ver.2

二 出逢い

「しまった！ 寝過ごした！！」

少年はがばつとベッドから跳び上がり、窓を開けた。大きな青い空が顔をのぞかせる。彼は急いでベッドから飛び降りた。そのとき、散らかっていた本の角を思い切り踏んでしまった。

「痛つてー！！」

猛烈な痛みが彼を襲った。普段から片づけておくべきだったと後悔しながらも、階段を駆け降りた。

彼の名はソウル。

いつの頃からか剣を持った剣士に憧れ、小さい頃から剣を手に腕を磨き続けていた。自分の剣技を極めることだけを目指し、そしてそれを彼自身の生きがいとしてきた。

最近になって、世界を脅かす根幹である魔物が急激に増え始め、ソウルの剣士魂をより一層奮い起こさせた。

毎晩遅くまで訓練に励み続け、そして今日という大切な日に寝坊してしまった。ソウルは寝坊した自分に腹を立てて、階段を降りる降りるといふよりかは、飛び降りていた。

階段がきしむ音を立てた。いつ穴が開くかもわからないような危険な階段だ。

階段を降りきると、机の上にはきつちりとそろえられた朝食が並べられていた。こんがりと焼き上げられたトーストと冷たいミルクが置いてある。ソウルはトーストを口に詰め込みミルクでそれを流し込むと、壁に吊るしてある鉄製の防具を肩にかけた。真っ白な布製の服に、緑のズボン。黒いベルトに茶色の防具。ソウルのお気に入りの格好だった。そして鏡を見ながらくしゃくしゃな茶髪の頭を確認すると、自分の瞳の色が茶色なことに目がいく。

「まずいな……。完璧に遅刻だ……」

ソウルは扉の前に立つと、壁に立てかけていた愛用の剣を鞘ごと背負った。父親に貸してもらった大切な剣だった。

一度深呼吸をすると、勢いよく扉を開いた。すると、そこにはたくさんの村人があたりをうろついていた。ソウルの出発を見送ってくれる人たちだ。この村には頑固者の村長がいるが、彼は最後までソウルの遠出に反対していた。しかしソウルの強い意志に大敗を期し、最後は応援してくれるようになった。

ソウルは、みんなの前に立った。するとソウルの母、レナトリアが近寄ってきた。

「ソウル、どうしてこんな日に寝坊するの？」

レナトリアはあきれたように首を振り、息子をたしなめた。

「仕方ないだろ？ 疲れてたんだから……」

ソウルは申し訳なさそうに言い訳した。

その時。ソウルはふと視線をずらすと、顔を真っ黒な仮面で隠し、黒いマントに身を包んだ男が立っているのが目に入った。

「あんたも送りに来てくれたのか？」

歩み寄って軽く言ったソウルに、男は返事もせずにくるりと向きを変えてソウルから離れた。

「はあ。相変わらず意味のわからないやつだな……」

あの男をソウルは何度も見てきた。気がつけば近くにいたり、そうかと思えば知らない間に姿をくらませていたり……。何度も話しかけてはいたが、ソウルは彼の名前は知らないし素顔を見たこともなかった。

しかし、一つだけ知っていることがあった。彼が危険な人物であるということだ。

彼の腰には、彼自身の背丈を越えるほどの長い細身の剣が据えられている。漆黒の鞘におさめられたその剣は殺気に満ち溢れている。はじめはソウルも警戒していたが、いつしか彼を身近な存在に感じるようになっていた。危険だということは分かっているのだが……。

「ソウル。いよいよだな」

声をかけてきたのは、この村の村長、マーディだった。そして、そのそばに立っていたのはソウルの師、ダッサム。身長はソウルより頭一つ分ぐらい大きかったが、ソウルと同じような剣を背負っている。白と黒の混ざった色合いの服を身にまとって、すこし目立っている。

「またその剣を背負ってんのか？ いい加減、外せよ」

少し生意気な口調で睨むソウルの頭に、ダッサムは手を置くと、ソウルの頭を撫でた。

「これは俺の魂なんだ。お前も知ってるだろう？」

やさしく言葉をかけるダッサムの手をソウルは振り払った。

「な、何すんだよ!？」

「ソウル!! 先生に向かってそんな口のきき方してるの？」

横から怒声を浴びせるレナトリアに、ソウルはうんざりしていた。

「お母さん。大丈夫ですよ。いつものことですから」

にっこりというダッサムに、ソウルは心の片隅で感謝していた。

「ソウル。あ父さんが見つかるといいな」

ダッサムの言葉に、村長も頷く。顔に刻まれた深いしわが特徴的だった。

「その通りじゃ。ソウルよ。あれだけわしに唾をかけながら力強く言ったということは、覚悟は決まっておるんじゃないかな？」

「ああ。俺が必ず見つける。それまで待っていてくれ。」

「自信满满だな」

突然の聞きなれた低い声に、ソウルは身震いした。

「なんだ、マートルか。驚かすなよ」

ソウルの後ろに立っていたのは、年齢四十歳前後のマートルだった。隣の家の住人で、昔からソウルの遊び相手になってくれていた。いつもと変わらない服装で、布の服の上に分厚いポンチョを羽織っている。

「全く、昔から世話の焼けるやつだぜ」

はははと大声で笑うマートルをよそに、ダッサムは真剣な眼差しでソウルに話しかける。

「ソウル、ひとつだけ約束してくれどんなことがあっても必ず帰ってくるよ。お前は俺の、一番弟子だからな」

ダッサムの言葉に、ソウルは自信に満ち溢れた表情で大きく頷いた。

「当たり前だろ。約束する」

ソウルは手を差し出す。ダッサムはその手を強く握り返した。

「そういえば、一人前になったらお父さんに剣を買ってもらおうのだつたな？」

剣を指さしながらダッサムが言った

「ああ。何だかよくわからないけど、とびきりすごいやつらしいんだ!!」

目を輝かせるソウルをダッサムは笑ってみていた。ここでは、剣士たちの間で暗黙のルールというものがあった。それは、一人前の剣士になるまでは自分の剣を持つてはいけないというものだった。

一人前になるまでは、誰かの剣を使うか、訓練所のものを借りなければならなかった。ソウルは早く自分の剣を持ちたくてしかたがなかった。

「じゃあ、頑張ってお父さんを見つけないな。」

「待ってるよ」

「おいソウル。口の周りにトーストの粉がいつぱいついてるぞ。」

マートルの言葉に、慌てふためくソウル。それを見た村人たちは、どっと笑い出した。顔が真っ赤になっていたのは、ソウルとレナトリアだけだった。

この村の名は、テイセフ。フレイド大陸に位置するジェルランド国の南端にあるその村は、村人数こそ少ないものの、賑やかな町だった。フレイド大陸は世界地図でいう南端。比較的大きな大陸だが、世界一大きな大陸であるマダレーシャン大陸には程遠い。東には小

さな島ウオーリネス島が位置し、その島との交流も盛んだった。また、フレイド大陸以外の大陸、島との交流は基本的に船で行われる。フレイド大陸では、ティセフから山を一つ越えたところにあるマストポートという名の港町がこの大陸の玄関口となっていた。そのため、マストポートでは昼夜を問わず賑わいに溢れ、町から光が消えることはないという。他の大陸の情報はその町から各町、村へと伝わり、自然に世界事情は広まるのである。近々ウオーネリア島のジエルド城からの使節団がマストポートへと訪問に来るといふ。

普段は商人たちが港町からティセフへ商売目的にたびたび訪れる。ここでは自然豊かなティセフ産の商品と、商人たちが持つてくる鉱石などを売り買いついていた。この付近ではほとんど採掘されないフトマレイ鉱石などは、ティセフの住人には目から鱗が落ちるものだった。

しかし数週間前から、フレイド大陸の南に位置するアデイス山脈の火山活動が活発になり、最近では頻繁に噴火が起こっていた。アデイス山脈の近隣にあるティセフは、風向きの影響で噴火の被害をよく受けていた。そのため商人たちがめっきり来なくなったのだ。そこでソウルの父、ウツドを隊長とする調査団がアデイス山脈へ調査に向かったのだが、何日経つても戻ってくる気配はなかった。

彼はこれに不安を感じ、周囲の反対を押し切って、調査団の捜索を決意したのだった。

ちょうど仕度が終わった時。向こうから行進してくる無数の足音が聞こえ始めた。ソウルは音のほうに目をやり行進の正体をたしかめた。

村の兵士。兵士たちはこちらに向かって歩いて来て、ぼかんと口を開けているソウルの目の前で止まると、全員気をつけの状態でソウルの前に並んだ。光を反射するほどピカピカに磨き上げられた黒色の鎧を着た兵士たちは、気持ち悪いほど礼儀正しかった。村人たちは、賞賛の言葉を発した。

「おはようございます。このたびはどうぞ宜しく願います」

十数人ほどいる兵士の中で、隊長らしき兵士が一步前に出て挨拶した。年齢は推測で二十代前半といったところだろう。がっちりとした体つきで、顔立ちも整っており、瞳の色は漆黒。混じりけのない純粋な黒だ。それに合わせたように、髪もまた黒く、首元までさらさらの髪が伸びていた。兜をかぶっついで顔全体は見えないが、きつと美顔に違いない。

「あなた……誰？」

ソウルはこの人たちをまだ理解しきっていなかった。ダッサムが後ろからソウルの頭をつかむと、無理やり頭を下げさせた。

やがて日が暮れてきたが、ソウルたちは足を止めなかった。きちんとした道を通れば、足に疲労がたまることもない。だが、今は一刻もやくアデイス山脈にたどり着かなければならなかった。だから、舗装されていない山の険しい道を歩いてきた。みんな死にそうになるほど腹が減っていたが、全員一言も話さずに、ただ黙々と歩いていた。ソウルは数時間前のことを思い出した。

「今回、あなたと一緒に搜索してもらった方たちよ」

レナトリアはにっこりと笑った。

「俺、こんなの聞いてないぞ!!! どういうことだよ。ちゃんと説明してくれよ！」

ソウルは焦っていた。一人で行かせてもらえる、自分の剣筋をやっと認めてもらった。そう思って、正直嬉しかった。なのに……どうして？ソウルは、内心がっかりしていた。

「俺に護衛なんていらさないよ。一人で行く」

ソウルは思い切って口にした。

「でも、あなた一人じゃ心配で……。あなたもまだ、子供じゃない」
レナトリアはうつむいた。

「もういい加減にしてくれよ!!! もう子供扱いされたくない!!!」

俺は……何が何でも一人で行く」

ソウルは憤慨した。しかし、レナトリアも負けてはいなかった。「でも、あなたはわたしの一人息子なのよ！そんな簡単に行かせられる訳ないでしょ！！」

レナトリアの目は、もう涙ぐんでいた。その言葉にソウルは、一瞬たじろいだ。ソウルは、レナトリアの涙に弱かった。口げんかになったときでも、レナトリアの涙をみるとつい謝ってしまった。

「わ、わかったよ。一緒に行けばいいんだろ？」

その言葉を聞き、レナトリアは微笑んで、

「気をつけてね」

とだけ言い残し、家に入ってしまった。その背中が、いつもと違ってみえた。

「そろそろ休もう。あたりは真っ暗だ。これ以上むやみに進んでも、かえって危険なだけだから」

ソウルは、兵隊長に指示をだすよう促した。本当に真っ暗だった。空からの光といえば、弱弱しく降り注ぐ月の光ぐらいだった。今日も星は出ていない。

そんななかで、兵隊長は全員に向かって大声で指示を出した。

「全員、天幕を張れ！」

兵士たちは、疲れているはずの体を機械のようにてきぱきと動き、天幕を張った。半刻ほどが経過し、ソウルは一つの天幕に案内された。

「ソウルさん、ここがあなたの天幕です」

兵隊長に招かれて中に入った。天幕の中はほのかなランプの光だけが灯っており、他は粗末な寝袋が置いてあった。荷物を降ろし、ソウルは中に入っている丸薬を呑んだ。溜まった疲労を回復させてくれる便利な道具だ。

しばらく天幕の中で荷物の整理をした後、ソウルは外に出た。妙に冷たい風がソウルの髪を揺らした。広場から離れ、しばらく歩く

と小さな岩を見つけ腰かけた。空を見上げたが、一つも星は見当た
らなかつた。昨年までは綺麗に星が輝く時期だつた。
だがしかし、最近は全く星が見えなくなった。それでも、ソウルは
星の見えない空を見上げていた。すると、過去の記憶が走馬灯のよ
うに彼の脳裏を走つた。

「ねえ、お父さん」

ソウルがまだ5歳にも満たない頃、父親と一緒に森の中で星空を
見上げていたとき。ソウルはウッドに訪ねた。

「どうして、あのお山は火をはかないの？」

ソウルはアデイス山脈を指差して聞いた。

「ん、あれか？あれはな、お山の神さまがお世話をしているからさ」
ウッドは、ソウルに優しく教えてあげた。

「神さまって、あの鳥の格好をした神さま？」

ソウルはウッドの足元で同じように山を見ている。

「ああ、そうさ。よく村長からも話を聞くだらう？」

ウッドはソウルを抱き上げた。

「お世話って、何をしているの？」

ソウルは、父親の服を引っ張りながら聞いた。

「それは、大きくなってから分かるからな」

ウッドは、ソウルを背中に背負って、もと来た道をもどり始めた。

「じゃあ、早く大きくなりたい！」

ソウルは、父親の背に顔を押し付けながら、大きな声で叫んだ。

「それなら、こうやっていつまでもおぶってもらっていたら、いつ
までたつても大きくなれないぞ！」

ウッドは笑いながら、ソウルにささやいた。

「じゃあ降りる」

ソウルは、父親の背中の中で暴れた。

「分かつた、分かつた。降りしてやるから」

ウッドはソウルをゆっくりと降りした。ソウルはウッドの周りをぐ

るぐると回り、楽しそうに笑っていた。ウッドもにつこり笑った。この平和はいつまで続くのだろう。この子は、まだ自分の宿命に気づいていない。いや、気づかない方がいいのかも知れない。そう心でつぶやきながら

「ソウルさん、いかがなさいましたか？」

ソウルは、兵隊長の声で我にかえった。ソウルは昔の自分が馬鹿らしくなって笑っていたところだったので、兵隊長は不安そうな顔でソウルの顔を覗いていた。

「ああ、あんたか」

ソウルは、無愛想に返事した。恥ずかしかっただけに、より冷たく接しようと思えた。

「はい。……」

「なんだよ？あんたらしくないじゃないか」

「ええ。実は、これをお渡ししたくて」

そう言いながら、兵隊長はひとつの白い包みをソウルの前に出した。ソウルは兵隊長から包みを受け取り、静かに開いた。すると、それは銀色に輝く一本の剣があった。その剣は、月の光を受けずとも、きらきらと輝いていた。

「これは？」

ソウルは剣を振りながら聞いた。その剣の軌跡は、自然と感嘆の声が出てしまうほど美しかった。

「この剣はあなたのお父様があなたのためにとっておいた剣です」

……。少しの間、沈黙が続いた。

「今、何て言った？」

ソウルは手を止めた。兵隊長は驚きもせず、冷静に答えた。

「ソウルさん、あなたのお父様があなたのためにとっておいた剣です」

「……何かの間違いだろ？」

ソウルはふんと鼻で笑うと、そっぽを向いた。

「いいえ、確かにウッド様は私に、この剣をあなたに渡せとおっしゃいました」

兵隊長は、口調を強めて言い返した

「うるさい!!」

ソウルの動きは早かった。風のような速さで、兵隊長の心臓を目掛けて剣を突き刺そうとした。

しかし、兵隊長も伊達に隊長を務めていたわけではなかった。ソウルの突き刺した剣を、軽々とかわし、ソウルの腕を掴んだ。

「話を聞いてください!!」

ソウルにも互角の力はあった。剣士になっても、実戦で力を発揮できなければ意味はない。

ソウルはすばやく兵隊長の後ろに回り込み、腰から一本の短刀を引き抜き、兵隊長の足に向かって一閃を放った。しかし兵隊長は、もう片方の手で短刀を振り払った。地面に短刀が転がり落ちた。

ソウルは兵隊長がナイフを拾うと思い込み、短刀を蹴った。

「ソウルさん!! 私はあるあなたに刃を向けたりはしない!!」

その言葉は、ソウルの耳には聞こえなかった。

「ソウルさん!!」

兵隊長は大きな声でソウルの名を呼んだ。ソウルは、兵隊長を思いきり押した。兵隊長は、その場に転んだ。兵隊長は上を見上げた。そのとき、ソウルは剣を宙に弾ませ、逆手に持ち替えた。そして、兵隊長に刃を向けた。ソウルの手は震えていた。ゆえにいつもより力なく剣を突き刺した。

すると兵隊長はためらいもなく剣を掴んだ。

剣に黒ずんだ血が滴り落ちた。ソウルはあわてて剣を引き抜こうとしたが、兵隊長の手はがちり剣を掴んだまま、離れようとはしなかった。

「す、すみません。せつかくの剣に、私のような人間の血がついてしまつて……。」

兵隊長は腕に巻いてあつた布を外し、ソウルの剣についた血を拭

き取っていた。兵隊長は自分の手など気にしていなかった。

ソウルはそんな兵隊長を見て、無性に腹が立った。殺してやりたい程憎らしかつた。しかし、兵隊長の手から流れ出る血を見ると、何もせずにはいられなかった。

「いい加減にしろよ！！ あんた……馬鹿だろ」

ソウルは兵隊長の手から強引に剣を奪い取り、あたりに投げると、兵隊長の持っていた布をひたたくって兵隊長の傷口を縛った。兵隊長は思わず目を見張り、驚いた様子だった。

「これで、一応大丈夫だ」

ソウルは静かに立ち上がり、剣を拾った。

「ありがとうございます」

兵隊長も立ち上がり、礼を言った。彼は布を巻かれた手を眺めた。その場に少しの沈黙が訪れた。

「名前、聞いてなかったな」

ソウルはうつむいて言った。

「え？」

「名前だよ。な、ま、え！！」

ソウルの顔はすこし赤らんでいた。兵隊長はそれを見逃さなかった。

「あっ、名前ですね？ラドムといいます」

そのとき、ソウルの腹が大きな音をたてた。あたりに大きな音がこだました。

「ははは……」

ソウルは、恥ずかしさあまり顔を背けた。

「さあ、これから冷え込みます。キャンプに戻って、腹ごしらえでもしましょう。」

兵隊長のラドムは、思わず吹き出し笑いをしてしまった。

ソウルと兵隊長のラドムの間にも、もう言葉は必要なかった。二人は、天幕の明かりの灯るキャンプへ向かって歩き出した。

第一章 灼熱の火山 ver.2 (後書き)

やっと主人公が登場したものの、なかなか話に展開が見られなかったような気が……。

あきらめずに頑張ります。

次回もぜひ読んでみてください！！

第一章 灼熱の火山 ver.3 (前書き)

今回はできる限り人物の背景を描こうと頑張りましたので・・・。
もしよければご意見・ご感想をお聞かせください。

では、どござー！

第一章 灼熱の火山 ver.3

翌朝、すっかり片付け終わった広場を後にし、一向はアデイス山脈へ向かって歩いた。途中、険しい道が続いたがソウルは苦にも感じなかった。

「あのみ」

ソウルは、山道の途中ラドムに話しかけた。

「何でしょう?」

ラドムは、少し息が切れかけている様子だった。しかし、ソウルのことは無視できないと思い、返事をした。

「昨日は悪かったな」

ソウルは、ラドムの手の傷を見て心を痛めた。

「ああ、別に気にしないで下さい」

ラドムは軽くそう言い、また前を向いた。

「聞かないのか?」

ソウルは驚き、ラドムの顔をのぞき見た。

「何をですか?」

「いや、だから……どうして俺があんたを斬ろうとしたのか……」

ラドムは黙っていた。そしてついに、口を開いた。

「実は、最初からわかってたんです」

「どういうことだ？」

ソウルは意味がわからなかった。最初からわかっていた？何を言っているんだ？

「あなたのお父様は、私に剣を渡すときにこうおっしゃいました」
ラドムは何かを思い出すかのように、目を閉じた。

扉が静かに開いた。訓練中の兵士達は、思わず扉に目を向けた。すると、そこには布でくるんだ白い包みを持つウッドが立っていた。

「ラドム、ラドムはいないか？」

ウッドは大きな声でラドムの名を呼んだ。彼がまだ兵隊長になつたばかりの頃の話である。

「全員、訓練を続けろ！」

ラドムは兵士達に命令し、ウッドの元に駆け寄った。その間、兵士たちは訓練に精を出すことはできなかった。

ウッドは村一番の頭脳を持ち、村人たちからの尊敬を集めていた。しかし彼の酒癖はとどまることを知らず、酒に溺れやすくはなかったのだがコストの面で家族に大迷惑をかけることもしばしばあった。

「ウッドさん、お久しぶりです」

ラドムは、にっこり笑って挨拶した。

「おう。お前さんが、兵隊長になったって聞いたもんだから、ちゃんとやっついていけるか心配だな」

「大丈夫です。ご心配にはおよびませんよ。それより、今日はどういったご用件で？」

ラドムは、ウッドに問いかけた。

「ああ、そのことなのだが、すこし頼まれてくれないか？」

ウッドは、静かに包みを開けた。そこには銀色に輝く一本の剣があった。

「武器の調整ですか？しかし、研いだり鍛えたりしなくとも立派に見えるのですが……」

ラルドはウッドから剣を受け取り、しばらく眺めた。

「これは……」

しばらくしてウッドが口を開いた。

「これはただの剣じゃない」

「ええ、見ればわかりますよ。こんな立派な剣、生まれて初めて見ました。いくらでご購入されたのですか？」

ラドムは剣を一振りした。振るたびに何か強い意志のようなものを感じた。

「これは、アデイス山脈の奥深くに封印されていた、古の剣だ」

ラドムはぴたりと手を止めた。

「先日、我々調査団がアデイス山脈に伝わる歴史を調査するため、いつもよりも奥深くに入ったときのことだ。そのときにこの剣を見つけた。まるでこの剣に意志があるかのように、我々の目の前に突如現れた」

「私も自分の目がおかしくなったとでも思った。しかし、剣はしっかりと地面に突き刺さった」

ラドムは驚愕し、言葉もでなかった。

「わ、私はこの剣をどうすればよいのですか？」

ラドムははっきりしない言葉で、ウッドに聞いた。

「この剣を……時が来たら、私の息子に渡してくれ」

「息子さんといえば、ソウルさんですか？」

「ああ」

ウツドはうつむきながら続けた。

「頼む！ 理由はきかんでくれ！ とにかく、……時が来れば息子に渡してほしい」

「わ、わかりました。ですが、時とはいつのことですか？」

ウツドは真剣な顔で答えた。

「それは、お前さんに任せる。ソウルのことだから、お前さんのことを怒るのではないかと思う。そりゃあ誰だって自分の父親からのものなのに、知らんやつから剣を授けられるのは気持ちのよいものではない。もし、あいつがお前さんのことを斬ろうなんてことをすれば、その時は……よろしく頼む」

ウツドはそう言い残し、訓練所を出て行った。ラドムはしばらく呆然と立ち尽くしていたが、兵士に声をかけられ我にかえった。

「あときは、やはり親子だなあと感心しましたよ」

ラドムは、明るく笑ってみせた。ソウルはたったの半刻ほどで、いろいろなことを知りすぎてしまった。自分の父親がそんなことをしていたとは考えたこともなかった。それよりも自分の背負っている剣のことも気になった。ソウルの頭の中はパニックに陥った。既に疲れさえも感じていなかった。しばらくソウルは無言のまま歩いた。

「すみません。今この話をするべきではありませんでした……」

ラドムは、申し訳なさそうにうつむいた。

「いや、話してくれてありがとう」

ソウルは静かにそう言い、二人はまた無言になった。

ちょうど山の中腹に差し掛かったあたりの広い場所で、休息をとることになった。しかしこの場に長居するつもりはなかったので、天幕は立てずに各々が手近な岩に腰掛けた。

ソウルは岩に腰掛け一息つくくと、荷物の袋から冷え切った水と昨晩に残しておいた肉を取り出した。

昨夜の夜はキャンプで、簡単に焼かれた肉が全員に配られたので、ソウルは今日のために少し残しておいた。ソウルがにやりと笑い、口に肉の塊を詰め込もうとした矢先、空中を飛んできた獯猛な鳥にすばやく持ち去られてしまった。

「お、おい！！俺の肉、返せ！！」

ソウルは飛び行く鳥に向かって大声で叫んだが、声がむなしくこだまただけであった。

「ちえっ」

ソウルはふて腐れて、ドスンと地に腰を着いた。ソウルはふと気づき、はっとしてあたりを見渡した。兵士たちは、ソウルのみっともなさには笑いをこらえていた。

「なっ！！ 何だよ！！ 悪いかよ！！」

ソウルは顔を背けてため息をついた。そのとき、顔を背けた先にいた人物に目が止まった。ソウルはぶつと噴き出すと、腰を上げて一歩一歩足音を立てずに忍び歩きを始めた。その場にいた兵士たちはソウルの心情を悟り、息を呑んでソウルを見守った。

ソウルは一人、自分に気づいていない人物の元に歩み寄った。そつと静かに、だが確実に近づいている。その人物の真後ろまで近づいた。兵士たちの視線はソウルに釘づけになっている。

そしてその人物が袋から小さく丸めた肉の塊を取り出し、口に運ぼうとした瞬間、ソウルは肉に向かってすごい勢いで手を伸ばした。

「もらった！！」

ソウルの手が肉に触れそうになった瞬間、視界から獲物が消えた。

「えっ！？ おっと！！」

ソウルは勢いを止めることができず、前のめりにそのまま倒れた。どつと笑い声が上がった。

兵士たちはみな腹を抱えて笑い出した。ソウルは恥ずかしさのあまり少しの間、顔を上げることができなかった。そしてソウルはちらりと顔を上げて振り向くと、ラドムが口に肉を放り込む姿が目に入った。

「ひどいなあ。ぎりぎりでかわすなんて卑怯だぜ？」

ソウルは体を起こすとくるりと振り向いた。

「甘いですよ。もっと周りの状況を把握しておかないと。急にみんなの話し声が消えるなんて、どう考えても不自然です」

ラドムは水を一口飲むと、につこりと笑った。ソウルは兵士たちを睨みつけると、兵士たちは急いで知らないふりをした。

「ああ。腹減ったなあ」

ソウルはわざとらしい大きな声で言うと、その場に座り込んだ。ラドムは袋に手を突っ込むと、中から一塊の大きな肉を取り出し、ソウルに向かって投げ渡した。ソウルはあわてて肉を受け取るとラドムに疑問の表情を投げかけた。

「少食なんですよ、私」

ラドムはさりげなく言葉を口にする、袋を片づけた。ソウルは満面の笑みでラドムに駆け寄りその隣に座った。

「おいおい照れるなよ？実は俺に渡そうと思って取っておいたんじゃないのか？」

ソウルは肘でラドムのわき腹をつついた。

「返してくれてもかまわないのですよ？」

「……ごめん。ありがとう」

ソウルはしゅんと静まり返ると、すばやく肉にかじりついた。まだやわらかく、口のなかに旨みがしみわたった。

「なあ、ラドムの小さい頃ってどんなだった？」

ソウルは口に肉を含んだまま、ラドムに話しかけた。

「小さい頃、ですか？」

「うん」

しかし、ラドムは黙りこんでしまった。できる限り、過去には触れたくないといった表情だ。

「私は……テイセフで生まれ育ったわけではありません。遠くの国から越してきたんです。それに、小さい頃の記憶がほとんど思い出せない。……いや、思い出したくないだけかもしれませんが。」

ソウルは空気を重くした責任を感じ、小さくごめんと呟いた。ラドムは腰を上げると歩き始めた。

「誰にでも、知られたくない過去ぐらいありますよ」

ラドムは片手を挙げ、歩きながら兵士たちに合図した。ソウルは残りの肉を急いで口に詰め込むと、立ち上がってラドムの後を追いかけた。

数時間後、一向は既に山のふもと近くまでたどり着いていた。そこには黒い煙をあげるアデイス山脈の姿があった。皆、一歩ずつが慎重な足取りになった。ソウルはつばを飲むと、気を引き締めなおした。

第一章 灼熱の火山 ver.3 (後書き)

次回からはいよいよ火山へ突入です。

・・・(未確認)

また読んでください!!

ではでは。

第一章 灼熱の火山 ver.4 (前書き)

どーも 作者です。

前回、ありがたい感想をいただいたので

いろいろと参考にさせていただきました。

これから登場人物等増やしていくつもりですので、

お楽しみに。

ではでは、本編へどうぞー！

第一章 灼熱の火山 ver.4

三 殲滅

その夜のこと。全員がほとんど疲れきっていたため、山のふもと
の近くでまた天幕を張ることになった。今日も空には星が見えず、
変に蒸し暑い夜だった。ソウルは星のない空を眺めていたが、ラド
ムに早く寝るよう促され、しぶしぶ自分の天幕に戻った。天幕の中
で、ソウルは立てかけてあるウツドの剣を眺めた。以前に愛用して
いた剣は、今回の旅では使わないでおこうと決めていた。ソウルは
数刻前にラドムから聞かされた話を落ち着いて考え直していた。確
かに最近のウツドは様子が変だった。落ち着きがなくなり、好きだ
った酒も飲まなくなった。

「そうか」

ソウルは静かにつぶやくと、出口からそつと外の様子を伺った。
ラドムの天幕にはまだ明かりが灯っていた。ソウルはもう一度剣を
眺めると、寝袋の中で深い眠りに落ちた。

「何！？ それは誠か？」

村長は椅子から跳び上がるような勢いで腰を上げた。部屋中にい
る全ての重役の目が村長に注がれた。テイセフの村長の家では、村
長らがアデイス山脈に関しての歴史調査を行っていた、が問題発生

だ。

「ええ。村の倉庫の床下に地下通路が発見されました。内部を調査したところ、古い書物が発見され、中に書かれていた内容が……」

「火山の結界内に特定の選ばれし人間が侵入すると、結界から呪術が発動する……と？」
村長は伸びきったあごひげをさすりながら、深刻な表情を浮かべていた。

「おそらく、先日のウッド殿の報告が真実だとすれば……特定の人物とは」

「ソウル」

全員の声が重なりあった。部屋中の空気が一変した。

「まさか彼に結界の戒めが発動してしまうとは……」

「ええ、我々も想定外の出来事でしたから。急いで伝令は送りましたが、間に合うかどうかは保障できません」

報告に来た重役は語尾を濁して言った。

「ソウルが無事に切り抜けてくれるとよいのだが……」

村長は椅子に腰掛けると頭を抱えた。部屋の中にいる全ての人間が焦りを感じていた。

「暑い……」

ソウルは、あまりの暑さで目が覚めた。体はだるく意識もはっきりとしなかった。寝袋から飛び出し、あたりを見回した。するとものすごい熱気を感じた。体中から汗が吹き出していた。

「な、何だ！？ この暑さは……」

ソウルは急いで剣を背負い外に出た。

すると、あまりの暑さに兵士たちは苦しみもだえ、いたるところで兵士が倒れていた。

「嘘……だろ？ 夢だよな？」

ソウルは自分の顔を何度も引つ叩いた。しかし目の前の光景はかわらず、ソウルは言葉も出なかった。

「う、嘘だ！！ぜんぶぜんぶ嘘だ！！」

兵士たちはソウルを見ると、必死に手を伸ばし助けを求めた。

「う、うわあ！！」

ソウルは腰を抜かししりもちをついた。苦しむ兵士たちの向こうに、ソウルは見た。剣を杖代わりにして、やっとの力で立っている

ラドムの姿を

「おい、しっかりしろよ。死ぬなよ、ラドム！！」

ラドムはソウルに支えられ、やっとのことで歩いていたが、ソウルに声をかけられると口をもごもごと動かしていた。必死の思いで川のほとりまで歩いてくると、川で水を飲む数人の兵士が目に入った。

「ここに座ろう」

ソウルはラドムを川のそばに座らせ、水をかけてやった。

「ありがとうございます」

ラドムは次第に調子を取り戻し、自分で川の水をすくい飲み始めた。ソウルは、ほっと一息つくくと、歩いてくる兵士二人を見つけた。二人は互いに支え合って歩いていたが、一人が倒れるともう一人も倒れた。ソウルは慌てて二人に近づいた。

「……大丈夫か？」

ソウルはかがんで倒れた兵士の顔を確かめた。よく見ると、初めに倒れた兵士は意識を失っていた。もう一人の兵士も息はしてはいないものの、虫の息だった。

ソウルは一目散に川のほうへ走り出し、水をすくって兵士のもとに駆けつけた。途中、石につまづき転びそうになったが、なんとか持ちこたえた。ようやくソウルは兵士たちのもとにたどり着いた。

しかし、ソウルが手の水を差し出した瞬間、兵士はソウルの手を振り払った。水がソウルの手から離れ、乾いた土に広がり、染み込んだ。ソウルは驚きの目で兵士を見た。兵士の目は憎しみの色に染まっていた。

「お前のせいでみんなこうなった。見えるか？ みんな……お前のせいで……。お前の母親が俺たちを雇わなければ、こんなことにはならなかった!!」

ソウルは返す言葉もなかった。

確かに彼の言うとおりのことだ。レナトリアが彼らを雇わなければ、こんなことにはならなかった。だがラドムがこの剣を自分に渡してくれることもなかった。しかし、結局は自分中心に物事が動いている。レナトリアが兵士たちを雇ったのも、その証だ。ソウルはバキッという奇妙な音で我にかえった。兵士はう仰向けに倒れ、その隣には体が震えて立っているラドムがいた。

「ラ、ラドム!? な、何やってんだよ!？」

おそらく、ラドムが兵士を殴ったのだろう。ラドムの息は荒かった。

「約束したはずだぞ、トーマス。どんなことがあっても彼を守り抜く、と」

ラドムは、息を切らしながらトーマスという兵士に言った。

「す、すみません。ですが……」

トーマスは、必死に言葉を発した。

「だが！？ 何だ、続きを言ってみる」

ラドムは、少し荒々しい口調で話している。

「ですが、彼はこの暑さの影響をほとんど受けていないようですよ。なぜですか？」

ラドムは、言葉に詰まった。ソウル自身も不思議だった。なぜ自分だけ暑さを感じるだけで、苦しみはないのだろうか。ソウルとラドムは顔を見合わせた。

そのときラドムは何かを感じていた。この少年に潜む計り知れないほどの何かを。

「だが、彼に気象を自由に操れるとでも言うのか？ そうでなければ、ただの言い訳に過ぎない。確かに彼の母は私たちを雇った。それも私たちを信頼していただいたことだ。わかったな！？」

ラドムは息を落ち着かせ、トーマスに手を差し出した。トーマスは手を伸ばしたが、ラドムの手に届く寸前であぐらと腕が垂れさがった。

ソウルは顔を上げることもできず、ただ茫然と目の前で起こったことを頭の中で繰り返し返していた。川にいた兵士たちも、みな倒れていた。ラドムの目からは涙がこぼれた。この出来事は、ソウルの脳に永遠に焼け付くのであった。

その後、ソウルとラドムは二人でキャンプへ戻った。しかし意識

のある者はおらず、誰一人として動ける者はいなかった。暑さはほとんど和らいたが、それでも異常な暑さだった。二人は荷物をまとめ、山のふもとへ向かった。地獄の火山へ、たった二人だけで向かったのだ

第一章 灼熱の火山 ver.4 (後書き)

やっぱり今回で火山への突入は不可能でした・・orz

でも、次回からは絶対的な突入を誓いますので、

また楽しんでください!!

また愛のある感想・評価をお待ちしております。

v) . .)

ではでは、また次の機会にお会いしましょう!!

第一章 灼熱の火山 ver.5 (前書き)

お久しぶりです、作者です。

最近は忙しくて更新が遅れておりましたが、また投稿することができました。

で、大変申し訳ないのですが。。

前回までの話を少し修正いたしました。

このまま本編を読んでも問題はないかと思われませんが、もし気になる方がおられましたら、ぜひもう一度読み直してください。

ではでは、本編へどうぞ!!

第一章 灼熱の火山 ver.5

四 煉獄の炎

二人は遂に山の入り口までたどりついた。

「ついにここまで来ましたね」

そこには、無残にもボロボロになった看板と、やっこのことで穴を開けている入り口しかなかった。以前はここに管理施設があったが、今は跡形もなく消え去っていた。入り口となる穴からは、熱風が吹き出ている。

ソウルとラドムは、顔を見合わせた。ソウルは帰りたいたい気持ちでいっぱいだった。体力の限界を超える疲労と、迫り来る恐怖に耐える自信がなかった。ソウルはふと雑念を抱いた。もしかしたら、ウツドは火山にいるのではなくあたりをうろついているのかも知れない。そうなれば火山に入る必要もなくなるし、今からすぐに村にも帰れる。きつとラドムも同じことを考えているかも知れない。

しかしここまで来て帰っては、村のみんなにも面子が立たないし、ウツドのことも心配だ。それにあの悪夢のような出来事で失った兵士のみんなにも申し訳ない。

「行こう」

二人は決心を固め、穴から中へと入っていった。

火山の中は、まっすぐに続く一本の道しかなく、道の両側は絶壁となっており、灰色の崖のはるか下は真っ暗だった。殺風景すぎる

光景だった。そして二人は、あたりを見回しながらしばらく歩いた。

「少し……休みましょう」

ラドムは、疲れきっていた。いつもは元気溢れんとばかりに若々しい顔が、仲間の兵士たちを失った悲しみや火山内部の暑さでやつれていた。

「ああ」

ソウルも休みたかった。二人は身近にあつた岩に腰かけた。まだソウルは自分が人とは違う力を持っていることに気づいてはいなかった。

しばらく休んだ後、二人は再び歩き出した。歩くうちにソウルは、今までは雰囲気が違うことに気づいた。ラドムもおそらく気づいているに違いない。二人は足を止めた。殺気を感じる。ソウルは剣の柄に手をかけて構えた。ラドムも同じように構える。ラドムと一緒なら安心だ。

「いつでも来い!!」

ソウルは、誰もいない空間に声をかけた。岩陰か？それとも、崖の下か？

「う、うわあ!!」

聞き覚えのない悲鳴が、あたりにこだました。

ソウルとラドムは、はっとしたような顔で走り出した。少し走ると、そこにはボロボロになった男が倒れていた。二人は急いで駆け寄り、よく確かめた。

すると、ウッドが率いる調査団の一員だということがわかった。その男は今にも息を引き取りそうなほど弱っていた。

「おい！！ 大丈夫か！？」

ソウルは調査員を抱え上げ、気を確かめた。どこかで見たことのある顔。

「ティフェンツェさん！！」

よく家にも遊びに来ていた。ウッドと同じ調査団の一員で、仕事の話で家を訪れることもしばしばだった。

「あ……あ」

ティフェンツェの体には、人間ではない何かに切り裂かれた跡があった。血が吹き出ている。ラドムは応急手当に使う道具を荷物から取り出し、手当を始めた。

「他の隊員はどこへ行ったのですか！？」

ソウルは大きな声でティフェンツェに聞いた。

「あなたの、お父様は……お一人で……頂に……。他の・みんなは……死んだ」

ソウルは愕然とした。やっぱり、みんな……。ラドムは無事、応急処置を終わらせた。

「ソウルさん、先を急ぎましょう！！」

「……ああ!」

「まっ……て……」

ソウルたちは、走り出そうとした途端、ティフェンツェに呼び止められた。

「どうした?」

二人は、振り返った。

「この先に、見たこともないやつが……いる。気をつける……」

「了解!」

ソウルはそう告げると、また走り出そうとした。すると、岩陰に……いた。今までに見たこともない、奇妙な未確認生物物体が。

「何だ、あれは!?!」

ソウルは指さすと、ラドムは剣を鞘から引き抜いた。ソウルは急いで剣の柄に手をかけた。背中に背負った鞘から剣を引き抜き、静かに構えた。虫……ではない。獣でもない……。体を緑色に染めた奇妙な生き物だ。

「ソウルさん!」

ラドムが、悲鳴に近い声を発した。あたりを見回すと、未確認生物物体に囲まれていた。

「く、くそ!!」

遠くで悲鳴がしたかと思うと、ティフェンツェの男は未確認生物物体に、崖から放り投げられた。

「ぎゃあああ……!!」

悲鳴はだんだん小さくなり、ついには聞こえなくなった。

「な、なんてやつらだ!!」

二人は、互いに背中を合わせ、急襲に応じられるように構えた。

「ソウルさん。気をつけてください。やつらは……魂喰虫と呼ばれる魔物です」

ラドムは静かに警告した。

「魂喰虫？何だよ、そんな名前は初耳だぞ」

ソウルは柄を握りなおした。

「ここ最近、このあたりでよく発見されている魔物です。我が隊にも報告が寄せられています。敵の隙をうかがって、多数で飛びついてくる魔物……厄介な敵に遭遇してしまったものです」

「ちょうどいいウォーミングアップだぜ」

「まずは一匹目」

ラドムがそうつぶやくと同時に、魂喰虫のうち一匹がラドムに飛びかかった。ラドムはソウルから少しはなれ、軽々と剣で斬り裂いた。飛びかかる魂喰虫を空中で斬る。魂喰虫は光となって跡形もなく消え去り、何も残らなかった。

それから次々と魂喰虫たちは二人に飛びかかった。ソウルは剣で次々と襲いかかる魂喰虫を斬り落とした。

どれくらいこうしただろう。ソウルの体力はもう限界だった。剣を支えにして、地面に膝をついた。しかし敵は攻撃をやめようとなない。ソウルは必死に立ち上がり、むやみやたらとあたりを斬り裂き敵をなぎ払った。

しかし　油断した。ソウルが息をついたその隙に魂喰虫はソウルの背中にへばりついた。

「うっ！！」

背中に激痛がはしる。ソウルは必死に振り払おうとしても、敵は動かなかった。

だめだ　もう力が出ない。ソウルは、その場に倒れこんだ。

そして、意識を失った

次に目が覚めたのは、固い平らな岩の上だった。そばでラドムが剣を研いでいた。ソウルは起き上がろうとしたが、思うように体が動かなかった。ラドムはソウルのそばに駆け寄った。

「気がつきましたか？」

ラドムは心配そうに、ソウルの顔をのぞきこんだ。

「俺が気を失っている間に、何があった？」

ソウルはゆっくりと体を起こし、自分が気を失っている間に何があったのかを聞いた。

「私は、倒せば倒すほど増え続けるあの魔物に限界を感じ、ソウルさんと一緒に逃げようと思いました。しかしソウルさんを見つけたときには、あなたは気絶していました。さすがにあなたの年齢で、あれほどの敵を倒すことは不可能でしょう。でも、やはりソウルさんにはびっくりさせられますよ」

「どういうことだ？」

ソウルは、ラドムが何を言いたいのかわからなかった。

「あなたは一度、あの魔物に崖から投げられそうになっていました。私は助けに行こうとしましたが、魔物に邪魔され食い止められませんでした」

「そして、もうだめだ、と思った瞬間……あの時でした。あなたの剣から光の波紋と同時に、大きな火がほとばしったのです。あの魔物たちは、瞬時に消え去りました。しかし、わたしには痛くも熱くもありませんでした」

ソウルは何がなんだかわからなくなつた。あの悪夢のような暑さといい、今回の件といい、

自分は何も意識していないのに、守られたり、不思議な力を放つたりする。

もしかして自分は人間じゃないのか？なんていう疑問すら、彼の脳裏にはあった。

「行かないと……」

「えっ!?!」

「早く親父を助けないと!! うっ!!」

ソウルは無理に体を動かそうとしたため、また激痛がはしった。

「……止めるなよ!? 俺は、親父を助けるためにここまで来たんだ。あんたの仲間を犠牲にしてまでもここまで来た。ここで止められて……たまるかよ」

ソウルは、剣を杖代わりにして立ち上がった。まだ、足取りも普通ではなかった。

「止めませんよ」

「!?!」

「私はあなたを止めません。わたしもここに来たのは、あなたのお父様を助けるためですか」

ら。さあ、行きましょう。時間がない」

ソウルは、改めてラドムの器の大きさに敬服した。なぜだかわからないが、胸にぐつとくるものがあった。ラドムはソウルに肩を貸

し、あやふやな足取りで歩き始めた。だが二人の心は揺るがなかった。

第一章 灼熱の火山 ver.5 (後書き)

火山へ突入いたしました!!

やっとのことですが、次回はもっと激しい展開に…

それは絶対お約束いたしますので、お楽しみに!!

ではでは、また読んでくださいね!!

第一章 灼熱の火山 ver.6 (前書き)

更新がかなり遅れたことをお詫び申し上げます。

実に71日間投稿できずに、

「この作者はやる気ないなあ」

などの感想は覚悟しておりましたので…。

ではでは、前書が長くなっても…ですので

本編へどうぞ…!!

第一章 灼熱の火山 ver.6

ソウルとラドムは、大きな広場に出た。空には、もくもくと黒い煙が立ち上っていた。

「あ、あれは!？」

二人が頂上に着いたとき、いつもより大型のけむくじやらの魔物がウツドを持ち上げ、地面に叩きつけた。ウツドは、そのままぐつたりと動かなくなった。

「あははは!! 無様だねえ。何が息子のため? 口だけの父親つても酷な息子さんね」

長髪を金色に染めた一人の女がウツドを嘲笑った。

「く、くそっ!! 許さねえ!!」

ソウルはラドムの肩を振り払い、魔物と女に向かって走り出した。「ん? まさか息子さん??」

女は走ってくるソウルに気づき、驚いた。

「あらあ気の毒ね。あなたの父親は今死んだばかりよ」「うるさい!! お前らだけは、絶対に許さない!!」

ソウルは電光石火の速さで敵の前まで詰め寄った。ソウルは剣を両手で握りなおすと、高く跳び上がった。女はソウルが高く跳んだのを確認すると、女も同じように跳び上がった。ソウルは女の行動に驚愕し、まんまと空中で腹に鋭い拳を入れられた。ソウルは剣を取り落とし、後ろに落ちていった。体中の神経が麻痺しているかのようにだった。

「ソウルさん!!」

ラドムは大きな声で叫んだが、ソウルは声を出すこともできなかつた。そして、背中から地面に墜落した。ソウルは何も感じる事ができなくなつた。痛みさえ忘れてしまうほどの衝撃を受け、体が動かなくなつた。

「ソウルさん、しっかりしてください!!」

ラドムはソウルの元まで駆け寄り、ソウルの意識を確認すると、敵に向き直った。

「お前は……一体誰だ!？」

「あたしはガリスト。まあ自己紹介するまでもなかったみたいだけど」

ガリストと名乗る女は長い髪を顔から払いのけると、手に力を集め始めた。次第にガリストの手には何かのシルエツトが浮かび始めた。そしてシルエツトが解け始め、一本の大きな鎌が姿を現した。

「!？」

「驚いた? ならばもつと驚かせてあげる!!」

ガリストは鎌で空を切った。ビュンという音とともに空間に大きな切れ目ができると、そこから突風が吹きこんだ。それにいち早く気づいたラドムは一步後退し、ソウルの腕を肩に回してかがんだ。

「やるわね。この風の影響をあまり受けられない低い位置に身を潜め、二人分の体重で風を無効化しようって寸法ね。なら、これはどうかしら?」

ガリストは鎌に額を当て強く念じた。すると風が収まり、その代わりに鎌が黄色い光を帯び始めた。

ガリストはその鎌でもう一度空を切った。ラドムはソウルを背負ったまま身構えたが、今回は空間に切れ目が現れなかった。そしてラドムが油断したそのとき、楕円形を描いた目に見えるほど強い風がラドムたちに直撃した。

ラドムとソウルは空中に投げ出され、ソウルの体はラドムの手から離れそうになった。しかし、ラドムは身動きの取れない空中で、巧みに体をひねりソウルを受け止め、地に落ちた。ラドムは背に強い痛みを感じたが、立てないほどではなかった。

しかし、すぐには立ち上がれずその場で痛みをこらえた。ソウルも今の衝撃で目を覚ました。

「あれ? 俺死んでなかったの?」

ソウルはキヨロキヨロとあたりを見回し、状況を把握すると身が引き締まった。

「じゃあ、あたしはこれで帰るわ。あとはあんたに任せるから。あっ、そうそう。ひとつ忠告しといてあげる。アセイルシックルを受けた兵隊さん、自分のこと気にしたほうがいいわよ」

ラドムははつとして自分の手を見た。両手は真っ赤に染まり、気づけば腹部からも大量の血が流れていた。どうして気がつかなかったのだろう。ラドムは腹部を押さえ、やっと痛みを感じ始めた。

「ラドム、大丈夫なのか!？」

ソウルはラドムのポーチから傷薬を取り出して、軟膏をラドムの皮膚の切れ目に塗った。

「友情っていいわね。あたしとあんたじゃうまく行きそうにないから」

ガリストは魔物に向かってそう言うと、風に吹かれて消え去った。ソウルにはなぜか、魔物が残念そうな表情をしていたように見えた。それよりもウツドはどこへ行ったのだろうか? さつきからウツドの姿が見当たらなかった。嫌な予感がする。ソウルは雑念を振り払おうと頭を激しく左右に動かした。今は戦いに集中しなければならぬ。

ソウルは数歩はなれたところに落ちていた剣を拾い上げた。なぜか剣の柄が熱い。しかし、大きな力がそれを伝わってこっちへ来るのがわかる。

ソウルは剣を一振りした。剣についていた土があたりに散らばった。最後にもう一度剣を握り、なおすと、ソウルは一目散に走り出した。

魔物は大きな腕をソウルに向けてなぎ払うように振った。

「あぶない!!」

ラドムは大声で叫んだ。しかし、ソウルは冷静さを保っていた。一度大きく跳んだかと思うと、空中でひらりと敵の攻撃をかわし、

魔物の腕を踏み台にして、もう一度大きく跳ね上がった。

魔物の腕は硬く、ソウルはそんな感触を確かめながら跳んだ。自分の身長は何倍もある魔物の顔まで跳んだのだ。

「これでも喰らえ!!」

渾身の一振りは魔物の顔を両断した。たくさんの血が飛び散り、魔物は赤く充血していた目を強く閉じた。

以前の彼ならできないことだった。自分の感情を抑えきれずに、心のままに動いていた彼には。そのことを自分の手に怪我をしても、ラドムは教えてくれた。

魔物は一瞬動きが鈍った。ラドムもその瞬間を見逃さなかった。

「追撃です!!」

剣を宙に弾ませて逆手に持ち替え、魔物の心臓めがけて渾身の力で剣を投げた。いつかソウルが、彼にやったことと同じように。

二人は、知らず知らずのうちに、互いに互いがいるいるなことを教えあっていたのだ。それは、彼らが互いに信頼し、尊敬しあつてこそできることだった。そう、二人は「友情」というかたい絆で結ばれていた。

見事に剣は、魔物の心臓に突き刺さった。血しぶきが上がる。ソウルは魔物の顔に一蹴り入れ、宙返りで優雅に地面に降り立った。

魔物は地響きを立て、後ろ向きに倒れて動かなくなった。火山の山頂が静まり返った。ソウルは剣を地に突き刺すと、手についた砂を払ってラドムに近づいた。

そして手を差し出した。ラドムも血で染まっていた手でソウルの手をつかんだ。強い握手が、彼らの絆を深めた。お互いが、最高のパートナーだった

ソウルは何かを思い出したようにあたりを見回した。

「お、親父!!」

ソウルは、遠くで不自然に横たわるウッドのそばまで駆け寄ると、父親を抱き起した。……何が違う。何だろう？

「ソウル。ちょっと見ない間に……大きくなったな」

ウツドは静かに手を伸ばした。ソウルはその手をしっかりと握った。しかし、その感触にも普段の父親ほどの力強さは感じられなかった。「何寝ぼけたことを言ってるんだよ。早く……帰ろう」

ソウルの目は涙ぐんでいた。

「お前の目は……母さんそっくりだ……」

ウツドはソウルの手を離し、息子の頬をさすった。

「さあ、早く帰ろう」

ソウル自身もわかっていたのかも知れない。ウツドはすで動ける体ではなかったことを。ただ、わかりたくなかったただけなのだ。ソウルの目からは、涙が溢れていた。涙が頬を伝う。ソウルは、よりいっそう強く、父親の手を握った。

「いいか、よく聞けよ。お前は、……普通の人間ではない……」

ソウルは、そんなことでも言われると思っていた。それなりに覚悟は決めていた。だが、信じることはできなかった。

「もう何がなんだかわからない……」

ソウルは、困惑しきった。

「今はそれでいい。これから、自分の本当の仲間を見つけ、世界を救え……。本当の仲間は……ある石を持っている……。その石を頼りに、世界を救え。その剣は……俺からのご褒美だ」

ソウルは、自分の父親が何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「あの兵隊長さんもそうかも知れないな。なあ、ラドム」

ラドムは遠巻きに見ていたが、静かにうなずいた。

「お前さんもちゃんとわかってるじゃないか……時ってものを」

ラドムの目にも涙が溢れていた。

「息子のこと頼んだぞ」

ラドムは、もう一度大きくうなずいた。

「い、いやだ！！ 親父！！ 死ぬんじゃないぞ！！ 今助けを呼んでくるから……」

ソウルは立ち上がろうとしたが、ウツドはその手を放さなかった。「ソウル。テイセフに戻った時、村長から俺の預けた荷物を受け取れ。そこに俺の気持ちすべて詰まっている。」

「なあに、お前なら大丈夫だ……。なんたって、俺が認めた自慢の息子だからな。ソウル……。よ」

その言葉を最後に、ウツドは動かなくなった。

村の人気者であり、家族の迷惑者であったが、誰よりも自分の息子を信じた英雄、ウツドの最期であった。

「う、うわあああ!!」

ソウルは大きな泣き声を上げた。その顔は、涙の跡で覆い尽くされている。

「まだ、何にも話してないだろ!?　なのに……。なんで死んじゃうんだよ!!」

ソウルは大きな声をあげた。

「俺の力が……。俺の力が足りなかったからだ!!」

ソウルは大声で素晴らしい、何度も地面を殴り始めた。ラドムは、そんなソウルの肩に手をおいた。

「あなたには……」

ラドムはそう言いかけたが、ふと妙な気配を感じた。そして、ラドムは、振り返った。やはり……。先ほど倒したはずの魔物が、よろめきながらこちらに歩いてくる。

「ソウルさん、逃げてください!!」

ラドムはそう言ったものの、今のソウルには全く聞こえていなかった。魔物は、自分の心臓に刺さっているラドムの剣を引き抜いた。ラドムは地に突き刺さっているソウルの剣を引き抜き、ソウルの前に立ちはだかった。魔物は剣を一瞬引いた。ラドムは迷った。ここで、自分がかわせばソウルに被害が及ぶ。彼には、まだすべきことが……。ラドムは忠誠心が強いがゆえに、心は一つに決まっていた。魔物は二人に剣を向け、狙いを定めた。

ソウルの背に生温かいものが触れた。ソウルはびくつとして、顔を振り向けた。

ラドムの手だった。しかし、先ほどまでのラドムではない。服は血まみれで、顔色が悪い。目は充血して、この一瞬に何があったのかを物語っている。

「ラドム……？」

ソウルは震えた声で呼ぶと、ラドムの手をとった。ラドムは何かを伝えようと、口を動かしたが、話す力さえ残っていないった。

そして、ソウルは見た。魔物の心臓にソウルの剣が刺さっている。魔物は大きく吠えると、ソウルたちに向って全速力で駆けだした。心臓を刺されながらも、形相はおぞましい。

ソウルは恐怖で顔を歪ませ、目を閉じた。そのとき、鈍い音とともにすごい勢いで、ソウルの手からラドムの手が離れるのを感じた。ソウルははつと目を開いた。ソウルは自分の目を疑った。そして、それと同時に悲しみと怒りが体の中からこみあげた。

魔物のなぎ払った腕がラドムに直撃し、ラドムが中に浮いた。そして、そのまま深い谷底へと落ちて行く。すぐにラドムの姿は見えなくなり、魔物はまた吠えた。

「ラドム！！ う、うそだろ！？」

ソウルは愕然としたが、今やるべきことはすぐにわかった。

ソウルは剣も持たず、魔物に向かって走り出した。殺してやる。ずたずたの八つ裂きにして、斬り裂いてやる！！

しかし剣も持たない彼は、魔物の腕に軽くはねのけられ、ゴロゴロと地面を転がった。手について立ち上がるうとしたが、目が回ってあたりの光景がめちゃくちゃになる。

そのとき、思わぬ出来事が起こった。ソウルと魔物のちょうど真ん中あたりの地面に亀裂が走った。そして、大きな音を立てて亀裂は次第に広がり、地面は真二つに割れ始めた。地が揺れている。

ソウルは飛びのき、なんとか落ちずに済んだが、魔物は底の見えない地底へと落ちて行った。ソウルの剣は奇跡的にも、魔物の体か

ら抜けていたため、ソウルの手元に戻ってきた。ソウルは剣を拾い、ウツドの亡きがらを抱え、その場を離れた。

ウツドを安全な所に置くと、一段と揺れが激しくなり始め、その瞬間、ソウルの剣が輝き始めた。

「な、何だよ？」

ソウルは剣を地に突き刺して揺れに耐えた。

すると次は、ソウルの周りの地面が割れ、炎が噴き出した。ソウルは逃げ場を失った。何本もの炎の柱がソウルを取り囲んだ。「ど、どうすればいいんだ？」

噴き上がった炎は生き物のように、ソウルの周りを旋回し始めた。ソウルは迫り来る炎に怯え、動けなくなった。そして次の瞬間、炎が一度離れたかと思うと、ソウルを包み込んだ。

「うわああああ！！」

ソウルはこの世のものとは思えないほどの激しい悲鳴を上げた。

不意にソウルを包んでいた炎がはじけて消え去った。

そして、そこに立っていたのは……ソウルだった。しかし今までの彼とは違っていた。

目つきが変わり、強い力を感じる。手にしていた剣も形が変わって、綺麗な銀色だった剣の刃身の部分が真っ赤に染まっている。刃の部分は銀色のままだったが、切れ味が比べ物にならない。その根元には、何かの文字が刻まれてあった。鰐は大きな翼の形へと変形し、鰐には紋章が映し出されていた。

そして、もうひとつ彼が手にしていたものがあつた。石。それもただの石ではなかった。手のひら程の大きさで、縦に長細く、両先はとがっている。うすい紅色で、ほのかな温かさで包まれていた。先ほど、ウツドが話していたものだろうか。

その石は、静かに光り輝き、神々しさをあたりに漂わせていた。

そう、これが魔石と呼ばれるものだった。ソウルが手にしたのは、朱の魔石。この魔石を通じて大きな力がソウルに宿った。

ソウルが小さい頃に父親から聞いた、「お山の神さま」が

第一章 灼熱の火山 ver.6 (後書き)

こんなめちやくちや不定期な更新ですが、

未永くよろしく願います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9736f/>

剣戟 ~ Spade Halberd ~

2010年11月29日08時07分発行